

正 信 念 仏 偈 24

■曇鸞讚②

天親菩薩論註解 天親菩薩の『論』（浄土論）を註解して、
報土因果顕誓願 報土の因果誓願に顕す。

現代語訳

天親菩薩の『浄土論』を註釈して、浄土に往生する因も果も阿弥陀仏の誓願によることを明らかにし、・・・

~~~~~

○「天親菩薩論註解」

曇鸞大師（476～542）67歳往生

※大師が登場した当時の時代状況については前回の講座で紹介

主著『往生論註』 = 天親菩薩『浄土論』の註釈書

『讚阿弥陀仏偈』

天親菩薩のみことをも 鸞師ときのべたまはずは  
他力広大威徳の 心行いかでかさとりまし

→ 曇鸞大師の『往生論註』を通さなければ、天親菩薩の『浄土論』の真意は理解できない。

○「報土因果顕誓願」

報土・・・因位の法蔵菩薩の発願・修行に報いて完成された浄土のこと。

**報土の因**

→ 浄土を建立し、どんなに煩惱が盛んで罪業が重くても必ず救う完全な願い。

**報土の果**

→ その願いよって寸分違わず完成した浄土

『教行信証』「証文類」（『註釈版』312）

それ真宗の教行信証を案ずれば、如来の大悲回向の利益なり。ゆゑに、もしは因、もしは果、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまへるところにあらざることあることなし。因、浄なるがゆゑに果また浄なり。知るべしとなり。

→ 「報土の因果」とは、「浄土往生の因果」と解釈することができる。

誓願・・・『仏説無量寿経』に説かれた法蔵菩薩の願い（四十八願）のこと。

『往生論註』（『七祖篇』155）

問ひていはく、なんの因縁ありてか「速やかに阿耨多羅三藐三菩提を成就することを得」といへる。答へていはく、（中略）おほよそこれかの浄土に生ずると、及びかの菩薩・人・天の所起の諸行とは、みな阿弥陀如来の本願力によるがゆゑなり。なにをもつてこれをいふとなれば、もし仏力にあらずは、四十八願はすなはち徒設ならん。いま的らかに三願を取りて、もつて義の意を証せん。

**（※以下に、第十八願・第十一願・第二十二願が引用される）**

ゆゑに速かなることを得る三の証なり。これをもつて推するに、他力を増上縁となす。しからざることを得んや。

→ **三願的証**

- ① 第十八願力によって速かに浄土に往生する
- ② 第十一願力によって浄土において速かに成仏せしめられる
- ③ 第二十二願力によって衆生を教化する利他のはたらきが与えられる

**第十八願**

わたしが仏になるとき、すべての人々が心から信じて、わたしの国に生れたいと願ひ、わずか十回でも念仏して、もし生れることができないようなら、わたしは決してさとりを開きません。ただし、五逆の罪を犯したり、仏の教えを謗るものだけは除かれます。

**第十一願**

わたしが仏になるとき、わたしの国の天人や人々が正定聚に入り、必ずさとりを得ることがないようなら、わたしは決してさとりを開きません。

※『一念多念文意』

これらの文のころは、「たとひわれ仏を得たらんに、国のうちの人・天、定聚にも住して、必ず滅度に至らずは、仏に成らじ」と誓ひたまへるころなり。

**第二十二願**

わたしが仏になるとき、他の仏がたの国の菩薩たちが、わたしの国に生れてくれば、必ず菩薩の最上の位である一生補処の位に至らせよう。それぞれの希望によって、自由自在に人々を導くため、固い決意に身を包んで多くの功德を積み、すべてのものを救ひ、仏がたの国に行つて菩薩の行を修め、すべての世界の仏がたを供養し、数限りない人々を導いて、この上ないさとりを得させることも自由にできる。すなわち、通常に超えすぐれて菩薩の徳をすべてそなえ、大いなる慈悲の行を實踐できる。そうでなければ、わたしは決してさとりを開きません。

☆衆生往生の因も果もすべて阿弥陀如来の願力によるものである。その具体的な相について、次の「往還回向由他力」以下、六句で示される。